

## 新聞掲載文章に関して

北海道名寄新聞 2000年5月～ 9月に渡って月に一度掲載

### 新聞掲載にあたっての経緯

ある雑誌に私が石彫家として掲載され、(教務補助の頃に石彫場にて撮影)それをご覧になった北海道上川郡下川町の観光振興青年部の方から石を扱っている若手の作家として、今後長い期間に渡って石の扱いを中心としたアドバイスを頂きたいという連絡があり、それから関わりを持つ。

具体的なプロジェクトとして、21世紀を初めとして、石を主に使用したフィールド美術館構想話から始まる。

新聞掲載は、町づくり計画段階で私がパリ研修に行く事になった為、パリでの生活や、各地に訪問した事などを月に一度程度新聞に掲載したいという依頼があり実現した。

詳細として、月に一回、文章1000文字程度、写真何枚かを送り、名寄新聞下川支局の方の手で調整されていた。

石の彫刻は町に設置される事が多く、その事からまちづくりに関してはもともと興味があったため、この下川町との出会いのきっかけがパリ賞への応募にもなっているといっても過言ではない。

パリ滞在の間、石の造形だけを見ていただけではなく、町における必然性、トータルなまちづくりに関して風土環境、宗教、人々の暮らしに石がどうかかわっているのか、その上でどういったデザインの物がでてきたのかという視点で研究する事を心がけた。

NAGASAWA 2001.9

皆さん初めまして。私は下川町の方々と「石」を通じて巡り会いました。下川町では町の皆さんや訪れた方々との協力により万里の長城という、ある意味一つの作品づくりを何年も前から行い、そして間もなく完成しようとしています。そしてその経緯で「石にこだわる町づくり」を今後長期に渡って行おうとしています。私は石を使って彫刻作品を作っている事により1年程前から関わりを持たせて頂いています。

今私は今年の4月から1年間の予定でフランスのパリに滞在しているのですが、フランスを初めとしてヨーロッパは木材も使いますが、全体的には石造りの町として知られているように思います。この掲載にあたって石に関連したことから、ここで暮らしてみても感じたことや、色々な国に行った事等を毎月1回程お便りしたいと思います。できればガイドブックに載っていないようなことをお伝えしたいと思っていますが、実際には私の視点から見て感じることを述べる事になりますので、それを通して皆さんがもしどこかの国に行かれた時に、自分だったらこう思うなあとかいったようにしていただければいいなと思います。

4月にパリに入ってわりとすぐにイタリアに行きました。パリからイタリアのフィレンツェまで夜行電車で14時間程かかります。寝台列車も連結されていますが、ほとんどの人はクシェットと呼ばれる一部屋6人寝ることのできる車両に乗ります。料金はクシェット代込で往復1320フラン（日本円にして22000円位）私がイタリアに行った時はちょうどキリスト教の復活祭の連休のときで、フィレンツェは人々でごった返していました。フランスとイタリアの町並みは同じ石作りとはいえかなり違うように思います。私としてはイタリアの方が色があって、活気があるように感じます。空の色や人々の顔つき、肌の色合い、そんなものも町の色に溶け込んでいるような気がします。

フィレンツェからバスで1時間程行った所にシエナと言う町があり、そこからさらに40分程行った小さな町に私の友人がいます。3つの町の規模はかなり違いますが、城壁に囲まれていると言う共通点を持っています。そしてその中の町は中心に広場がありそこから網の目のように通りが広がり、家々が立ち並んでいるのです。それらは旧市街といった言われ方をすることが多く、その城壁の周りにモダンな一軒家や建物が立ち並んでいます。（対して新市街と言ったりします）古いものを残しながら新しいものを作っていく、それがこちらでは多いのかなと感じています。

私が滞在している場所には様々な国の美術家や音楽家たちがおよそ200人程滞在しています。私の部屋は出身の大学が契約していて、この施設内にもう一つ所有しています。その二つの部屋には1年に2人、大学から選出された人が半年交代でそれぞれ1年ずつ滞在します。去年の9月から滞在していた人がたまたま同じ彫刻科の先輩で、その人が4月から5月半ばまでドイツのベルリンで展示を行っておりその片づけに車で行くと言うので便乗させてもらいました。

パリからベルリンまでおよそ1100キロ。ずっとオートルート(日本でいえば高速道路)を使います。ドイツで有名なアウトバーンとはオートルートという仏語をドイツ語読みしてます。道は広い片側3車線の道路がえんえんと続き、料金はほとんど払いません。地図で効率的な道筋を探し、フランスからベルギーを通過してドイツに入って行く事にしました。国境をこえる時のパスポートの検閲所はEU 統合の為すでにありません。日本でも地域によって車の走り方が違うと思うのですが、国によつての違いも感じました。日本と違うのは走るスピードがとにかく皆速いという所でしょうか。目前で車がびゅんびゅんと走っている様子を見ると、ハンドルを握ると人が変わるといった言葉を思わします。私達は平均時速120キロ位で車を走らせ、走行時間は約14時間かかりました。

ベルリンは壁が壊されてから去年で10年を迎え、先輩の展覧会場のあるベルリンの東側は道路や建物を再開発している真っ盛りでした。そのせいか私には色々な事に興味を持つ若い人たちが活気よくしているように感じました。

フランスへの帰路の中間の小さな町に、共通の知り合いが石の公開制作で訪れているというので帰りがけに寄ってゆくことにしました。訪れたマイエンという町はドイツ的なこぎれいな所です。ただ私達の滞在にあわせるかのように、この町から10キロ程離れた町でF1のレースが行われていて、ホテルは30キロ圏内どこも満室に近い状態といわれました。ドイツの人たち(恐らくヨーロッパ中の人)はF1とサッカーが大好きです。町の小さな広場ではF1効果をねらってか色々な車の陳列も行われていました。マイエンではホテルがなかったのでそこからバスで1時間位のコブレンツという町にホテルをとりました。ここはライン川とモーゼル川の合流地点で、そこを一望できるエーレンブレイトスタイン要塞跡に登り、遠くの町並みや雲が流れる様をしばし眺めました。

6月半ばに一週間程車を借りブルターニュ地方にある巨石文化を見に行く事にしました。出発が遅かったので、レースで有名なル・マンの町に宿を取ろうとした所どこも満室。ホテルの受付で悲しげにしている顔を見て、個人的な宿があるがそれでも良いかと言われついてゆくと、普通の一軒家の空き部屋だけを貸す、シャンプドットと言う形式の宿に着きました。少し遅めの到着だったのですが、その家のお爺さんやお婆さんに大変気を使ってもらい、ゆっくりとした時間を過ごす事が出来ました。

次の日の朝、お爺さんの読んでいた新聞に耐久レース車の写真がびっしりと載っており、ドイツに引き続きまたもや自動車レースにぶつかってしまった事が分かりました。

ル・マンを出て目指すはカルナック。今だその用途がハッキリとしないドルメンやメンヒルと呼ばれる巨石がブルターニュ地方には点在しているのですが、それが集中的に集まっているのがこの町です。その源はアイルランドにあるケルト文化にあるとも言われ、宗教、社会、政治的歴史を遡ってとらえてゆくと大変興味深い事につながってゆくのですが、色々なものを見る時には歴史的な事もさる事ながらひとまずその大きさや、その環境を肌で感じる事が一番の勉強だと思っています。そしてまた、体全体で楽しむ為にはなんといってもその土地の食事です。ブルターニュ地方はそば粉のクレープ（ギャレットと言います）、シードルが有名ですが、この時期はなんといってもムール貝です。新鮮なムール貝を一人当り1キロ程も一度に食べてしまいます。味付けも様々で全部で10種類以上も取り揃えてあるレストランもありましたがシンプルに白ワインで味付けしたのがやはり人気がある様です。でも個人的に今までで一番美味しかったのは実はベルギーで食べたムール貝でしたが。

風景の変わり行く様と巨石文化の変遷をあれこれと思い巡らしながらカルナックをあとにすぐ近くのモルビアン湾、その後イギリス側の海の方に車を走らせ、カルナック側との海の色の違いに驚き、そして夕方になったらどこかの町に泊まるという事をくり返して、パリに戻ってきました。パリに戻るに連れて人々の様子や町の様子が変わってゆくのを、フランスという一つの大きな国の中で様々な人々が様々な文化を育みながら生活している様をほんの一旦ですが感じる事が出来ました。

突然ですが、6月の終わりにイタリアのサルディーニャ島に木彫の公開制作（シンポジウムと言います）に行く事になりました。木を使って作品を作るのは大学以来6年半ぶりです。シンポジウムに参加する時にはどんな素材を使うのか、眠る所、食べる所、移動費はどうか、など色々な事柄を知った上で参加するのが常なのですが、そのシンポジウムを紹介してくれたフランス人の彫刻家の人は、ただただサルディーニャ島のOLBIA空港に行きなさい、と言うばかり。シンポジウムどころかサルディーニャ島についての知識もほとんど得られないまま、あたふたと道具を揃え、不安を抱えながらパリを出発しました。ローマを経由して4時間。空港に降り立った私を迎えに来てくれた町の人々の車に乗り込み、OLBIA空港から60キロ程内陸に入ったBUDDUSOと言う町に着きました。

今回は6日で作品を作ります。参加者はイスラエル、イタリア、韓国、トルコ、日本、フランス、ブルガリア、ルーマニアの国々から全部で16人。そのうち半分の人が栗の木の丸太を彫り、半分がマホガニーを板にしたものにレリーフを施します。ほとんどの人は1週間位の滞在だったのですが、私だけ飛行機の都合で2週間そこに滞在しました。他の人よりも4日程早く着いた私でしたが、シンポジウム担当部書の図書館兼文化センターの人達が何かんだと世話をしてくれました。ほとんどイタリア語の話せない私に、「ゆうこ、イタリアにいる時はイタリア語を話さなくてはいけないわよ」と色々と言葉を教えてくれました。私もその意見には同感で、どこかの国に行った時にはその国の言葉がペラペラと話せないまでも、「こんにちは、これ下さい、ありがとう、どういたしまして、ごめんなさい、さようなら」位はすんなりと出てくるようにしておいた方が良いと思っています。その人たちのおかげでシンポジウムの終わりの方は言っている事が何となくですが分かるようになりました。

この島は有史前から数多くの国に侵略を受けた歴史があり、歴史遺産も島の中に数多く残されています。また、食べ物、容姿、サルド語と言う言葉の存在、風習、人々の性質どれをとってもイタリア半島に住む人達とはなんだか違うような印象を今回受けました。そしてシンポジウムも無事に終わり、町の人達と再会を約束してパリに戻りました。

8月初めにアビニョンとリヨンに展覧会を見に2日かけて出かけました。アビニョンでは「美」というテーマで古い教会や歴史的建造物、町中の至る所に作品が展示してあり、見学者は地図をたよりに町を歩いたり、無料の特別バスに乗って見てまわります。

またリヨンではビエンナーレという形式の、4年に一度の展覧会が古い倉庫を利用した会場で行なわれていました。どちらも現代美術と言う枠組みの中に入ると思われる作品が多く展示してあり、素材もまた様々だったのですが、現代と言うのはそういった様々な視点からとらえなくては見えにくい程複雑化しているのだなあと単純ですがそう感じました。

美術作品を見る時には美術の歴史や決まりごとを知っていれば感じ方、とらえ方に奥が深まるのは事実ですが、単純にそして少し丁寧に見れば何となく感じるものがでてくると思っています。

その後8月半ばの2週間、パリから250キロ位の町に石のシンポジウム（彫刻公開制作 / 元は饗宴と言う意味）に行きました。参加者はオランダ、ブルターニュ地方、ノルマンディー地方、ポルトガル、アルメニア、日本出身の計6人。2人が柏木の丸太、4人が青い御影石を彫刻します。滞在場所は個人の家で、制作もその庭で行なったのですが、そこは家と言うよりまさにお城。庭もとても広く、前回迄の彫刻作品がころ合いよく展示してあります。又その御主人は画家であり、家の中や部屋などに多くの絵が飾ってありました。庭園、室内と大きな展示場といった感じでしょうか。また城の周囲は空と大地と牛や羊がいて、なんだか北海道にいるような気がしました。

2週間の滞在中、その家の奥さんが毎食料理をします。多い時で16人分の料理が食卓にならび、食事は会話をしながら全員で食べるというまさに大家族の様です。

シンポジウムの最後の日には作品の完成の喜びと共に悲しい日でもあります。大家族がちりじりになってゆくことと、そして又ほとんどの場合、自分の作品をその場においてゆく事です。作品は自分の分身、或いは子供のような感じに近いので、まるで娘を嫁にやる父親の心境に近いのかもしれない。（本当のところはしりませんが）半ばしんみりと、そして次への作品の新たな意欲を胸に抱きつつパリに戻りました。

9月と10月は日本から様々なお客さんがきて、その対応に追われていました。ヨーロッパは今頃が旅行にはよい季節らしく、パリを歩いていても若者よりも大人の旅行者が多く目につきます。天候的には不安定な時期で晴れていたかと思うと突然大雨が降ったりします。また夏の間は朝6時頃から太陽が照り夜は10時半くらいまで明るかったのですが、そういった昼間の時間もだんだん少なくなって、徐々に秋、冬に向っている感じがします。

そのような合間をぬって太陽を求めに南仏のアルルとアビニョンに小旅行に行ってきました。

パリを出る時はこのどんよりしたグレーの空から抜け出し、太陽がさんさんと照りつけ、心地よい風が吹く南フランスを想像していたのですが、最初の町アルルの駅に降り立った瞬間、大風に吹き飛ばされそうになりました。風のおかげで雲一つない天気だったのですが、こちらの地方によくあるミストラルといった気候にどうやら遭遇してしまったようです。風はとても冷たく、時折歩けない程の風が吹き付けます。ホテルの主人いわく、このミストラルに遭遇するなんて運がいいと言う事らしいです。「なぜなら淀んだ空気を流してくれるからね」と言いつつ。

アルルはゴッホが滞在して絵を描いたことで有名な町です。中心地から離れた通称「ゴッホの跳ね橋」が復元されているのでそこを訪れたり、町中にある古代ローマ風の建造物を見学して歩き回りました。

次の旅行地アビニョンは夏に展覧会を見に訪れたのですが、その時とは町の趣が少し違って普段の様子を見れた気がします。ここにはローマ法皇が長い間住んだという歴史のある町で、特に法皇庁のあった建物は必見と言うべきものです。つい先日まで私が訪れた展覧会をここでも行なっていたのでその片づけで入れない部屋もありましたが、展示のない空間を改めて見回すと、また違った素晴らしさが見えてきて一度見た所でも改めて見直すことは必要だなと感じました。

そしてここでもミストラルは吹き荒れ、有名なアビニョンの橋の上で地中海から吹いて来る風に吹かれながら訪れた二つの町のもつ遠い歴史に思いをはせました。

あけましておめでとうございます。21世紀の幕開けとなりました。

11月終わりから翌年の1月10日頃までシャンゼリゼ通りをはじめパリの通りのあちこちにクリスマスと年越しの為にイルミネーションが飾られます。パリは普段から店や看板のネオンなどに規制があるのと、使われている街灯がガス灯時代のなごりからオレンジ色の光だけなので、明かりによる町の彩りは華やかさをますような気がします。

また、いっそう寒さが厳しくなり、日照時間も少ないこの地ではなるべく人々が外に出かけるようなイベントも多く行なわれているように思います。

さて、日本ではクリスマスは盛大に盛り上がり、プレゼントの交換等を行なわれるのが一般的になってきました。クリスマスとはイエス・キリストの誕生を祝うお祭りです。そしてこのお祝は家族で静かに行なうのが一般的でクリスマス前後の3日程はほとんどの店やレストランは休業し、交通機関の本数もとても少なくなります。特に今年はキリスト教徒にとって大切な年、キリスト生誕2000年を祝う年なので、クリスマスイブの日はテレビではどの番組でもイタリアのパチカンのセレモニーを写し出していました。

私は今回クリスマスはアイルランドのダブリンで過ごしたのですが、この国は90パーセント近くの国民がカトリック教徒と言う事もあって、24日の午後から店がぱたぱたと店じまいを始め、26日まで道を歩いてもシャッターの音だけが鳴り響くような状態でした。まるでひと昔前の日本のお正月のような風景を見ているようで、なつかしい気持ちが湧いてくると共に、日本でそう言った光景が最近ついぞ見られないような気がして複雑な心境になりました。

さらには25日のクリスマスの日には飛行機が飛ばない日でもあったので私はパリに戻る日を一日ずらさなくてはなりませんでした。

その後年越しはパリで迎えたのですが、クリスマスが家族と共に過ごす日であれば大晦日は親しい友人達と過ごす日といったところでしょうか。パリの何ヶ所かで花火があがったり、パフォーマンスがあたり、コンサートがあたりと年越しまぎわから小雨になってしまったものの趣向をこらしたイベントの中で新年を迎え、集まった人々は口々にボン・アンネ！！（良いお年を・明けましておめでとうなどという意味）と叫び、あちこちでシャンパンを抜く音がしたりしていました。お店などのお休みはといえば1月1日だけで、美術館はお休みではありませんでした。



1 月半ば、エスカルゴで有名なブルゴーニュ地方に行きました。今回の目的は 10 世紀から 12 世紀にかけて建造されたロマネスク様式、その後続くゴシック様式の教会や、その内部・外部に備え付けられた装飾彫刻などを見に行くことです。多くの教会の場合、聖書が読めない多くの人の為にステンドグラスや絵画でキリストの教え、旧約聖書を伝えているのですが、ブルゴーニュ地方のいくつかの教会では教えを内部の柱頭にレリーフとして施しており、そのあまりのリアルさにテレビや雑誌などなかったころには本当に恐ろしく感じたり、神々しく感じたりしたのだらうなあと思いました。

ロマネスク期を中心とした中世ヨーロッパの歴史背景は一言ではお伝えしにくいので割愛させていただきますが、教会ひとつ見てもこの頃が西欧的精神が成立してきた時期だと言われるだけあってイスラム、オリエント、スラブ、北欧、ケルト、アラビア、ノルマンなど多くの文化様式が入り交じっており、それらがひとつのロマネスク様式として成り立っているのは、歴史を振り返って見ることのできる私にとって興味深い事柄です。

また中世ヨーロッパのキリスト教においてははずすことの出来ない二つの大きな修道会 -- 華美で贅沢、富みを蓄積したと言われるクリュニー修道会、それを批判するように祈祷、清貧、肉体労働、禁欲を中心としたシトー修道会 -- という 2 つの大きな修道会が生み出されたのはここブルゴーニュ地方で、その二つの修道会は全ヨーロッパに大きな影響を与え両会は当時たくさんの修道院を様々な地方につくりました。

訪れた町はディジョン、オートン、ヴェズレー、フォントネー。これらの町にある教会には前述で述べた柱頭彫刻があったり、様々な装飾が入り口や柱に施されています。ですが、その中のフォントネーは、逆に飾りは一切ない質素なつくりの修道院で、シトー修道会の代表的な施設と言っても良いでしょう。

教会はロマネスク期で 40 ~ 50 年単位、ゴシック期に於いては 100 年単位で建造されます。混乱の世にあって人々が宗教を基盤とした生活を送るに連れ、教会の大きさも変わってゆきました。また土着の信仰がキリスト教などと入り交じり、それらも教会の装飾に組み入れられています。私は教会を巡ることを通して、その当時の精神や生活などを感じられたらいいなと思っています。

夜の長い冬からようやく昼間の時間が少しづつ増えて何となく春の気配が感じられてきました。今年のパリは例年に比べて遥かに暖冬で、一番厳寒だと脅かされた2月も数日を除いてそれ程寒くはなりませんでした。フランス人の友人は年々ひしひしと地球の温暖化を感じると言っています。

フランス初めヨーロッパは石作りの家が多く、夏はそのおかげで涼しくて良いのですが冬は足下からしんしんと寒さが伝わって決めます。寒さを防ぐために、昔は壁に大きなタペスリーと呼ばれる絨毯のようなものを壁一面にはったり、革を一面に張ったりして壁から寒さが入るのを防いだり、床にふかふかの絨毯をひいたりしていました。今はヒーターが部屋の中に入り、建物中のヒーターに高圧の湯を循環させています。そのせいかアパートを借りたりしても水道代込の所が多いのです。建物はとても古い建物を内装だけ変えながら使用し続けているので、建物に埋め込まれた水道管が永年の蓄積で詰まりやすいとか穴があいて電気の線に触れて漏電したりなどのトラブルも良くある様です。

さて私の住んでいる所はパリ市内の真ん中辺り、ノートルダム寺院のあるシテ島のすぐ近くにあるのですが、近所にはマレ地区と呼ばれる古い石作りの建物が立ち並んでいます。想像が尽きにくいとは思いますが長年の石の重みでそれらは下の方が張出しており、横から見た感じは、中年のおじさんのお腹のような（皆さんがとは言いませんが）感じです。

こちらは日本と違って地震が無いので（あったのは何百年も前とか紀元前とか言われている程です）そうなっていても大丈夫なのでしょう。そして面白い事に建物を改装したり、古い配管を直したい時には道路に面した壁だけを残して裏側を全部壊して作りなおす事さえします。それがやはりこのパリと言う町並みを残すということにつながっているのだらうと思います。ある地区などは町並みの為に、外壁の塗り直しを何年かごとに行なっていて、そこに住む人たちはその為の費用を積み立てる事が住む条件として明記されているくらいです。また建物に使っている石は、パリの地下から掘り出した石を使っていると言う事ですが、それを掘り出したからメトロが出来上がった、,、, のかは知りません。